

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】北村 毅

【所属】(助成決定時) 早稲田大学高等研究所／早稲田大学琉球・沖縄研究所

【研究題目】元日本兵の沖縄戦体験記録の整理と集成
——1960年代に書かれた未公開手記を対象として

【研究の目的】

本研究は、沖縄戦帰還兵によって書かれた未公開手記(以下、「清水資料」)を整理および集成した上で、それらを①検証・解析すること、②学術誌などに掲載することにより広く閲覧可能な状態にすることを目的とするものである。「清水資料」とは、北海タイムス(北海道の地方紙であるが、1998年に廃刊)の記者であった故・清水幸一氏からご恵贈いただいた、沖縄戦を体験した元日本兵によって1960年代に書かれた未公開の手書きの手記を中心とした資料群である。清水氏は、同紙上で1964年4月1日から12月28日にかけて沖縄戦に関する連載を担当し、紙面にて資料提供を呼びかけた(沖縄戦における北海道出身の戦死者数は、沖縄県出身の戦死者数に次ぐ約10800人を数え、多くの遺族が肉親の死に関する情報を切望していたという社会背景がある)。その結果、帰還兵による手書きの手記の他に、手紙や戦死公報など多くの資料が寄せられ、同連載の基礎資料となった。これらの資料は、40年以上、取材ノートやメモ、写真なども含めて清水氏の自宅に保管されてきたが、近年研究代表者が寄贈を受けた次第である。

50点以上に及ぶ未公開手記には、既刊の沖縄戦体験記録(戦記)にはない重要な情報も多数含まれている。いずれも戦後約20年を経た段階で書かれたものであるため記述内容が詳細であり、多くの体験者が物故した現在においては、沖縄戦記録の空白を埋める上で重要な役割を果たすものといえよう。

【研究の内容・方法】

本研究は、以下の通り、六つの過程に添って進められた。

①PDF化

未公開手記の大部分は、わら半紙や原稿用紙などに書かれ、冊子の形態で綴じられているが、中には便箋や新聞の折り込みチラシの裏に書かれているものもある。これらの手書き手記を長期保存できる状態にするため、スキャナーで取り込んでPDFデータ化した。

②テキスト化

PDF化されたデータをもとに、一行一行照らし合わせながらパソコンに打ち込み、テキストデータに変換していく作業を行った。当該作業については、関連分野の大学院生に研究補助を依頼したが、判読が困難な文字については、「〇〇」などとして極力原文に忠実にテキスト化した。

③文章の整理

手書きの手記の原文は、誤字や脱字が多く、文体も不統一であり、ときには意味を読み取るのが困難なセンテンスも含まれている。そうした原テキストの文章を整理する作業を行った。その際、オリジナルの文章から逸脱することなく、必要最小限の文章の整序に留めることを方針とした。

④事実検証

テキスト化された手記の内容に矛盾がないか、事実に誤りがないか、専門的な見地から精査する作業を行った。地名や部隊展開などの誤りが散見される原文の事実検証を経た上で最終的なテキストを完成させた。

⑤掲載許可の確認

これらの未公開手記はすべて執筆者が清水氏に依託したものであり、その時点で実質的に掲載許諾は得られているものとみなせるが、可能な限り、本人または遺族に掲載許可を得ることを試みた。しかし、執筆時から45年以上が経過していることもあり、関係者の消息を辿るのが困難なケースが多かった。

⑥公開

今後、早稲田大学琉球・沖縄研究所の紀要などに数回に分けて掲載する予定である。その際、単に手記のみを掲載するのではなく、それぞれの手記の位置づけについて記述した資料解説を付記する。

【結論・考察】

最終的に 30 点余りの手記をテキスト化することができたが、これらの中から何点かをピックアップして、早稲田大学琉球・沖縄研究所の紀要などに順次掲載していく予定である。

以下、手記の事実検証作業を通して得られた見識を記す。手記が執筆された当時は、『沖縄方面陸軍作戦』などの公刊戦史が未刊行であり、公刊戦史というナショナル・ヒストリーを基準として自らの戦争体験を位置づけ直す作業を個々人が行っていない(しかもほとんどの体験者が沖縄を再訪していない)時期であった。本研究では、この歴史的条件(事後的な情報の介入が少ないこと)に積極的な価値を認めることができた。手記には、戦史という大局的・俯瞰的な視点からすれば事実誤認的な記述が散見されたが、中には単なる記憶違いとはいえぬものも多く含まれる。個々の戦争体験は、一概に公刊戦史に回収されるようなものではなく、むしろ戦史的にはノイズとして切り捨てられるような部分にこそ、書き手の戦争体験の核心がある可能性についての示唆を得た。

なお、当該資料のテキスト化、文章の整理、事実検証作業が予想以上に手間取ったため、その記述内容の解析については、十分に行えたとはいえない。証言の時系列的な整理や、手記を横断する一般的傾向の抽出などについては、本研究で得られた成果を基礎資料として、帰還兵による既存の証言記録と比較照合しながら、さらに研究を進めていきたい。